

諏訪形の石像遺物を訪ねる

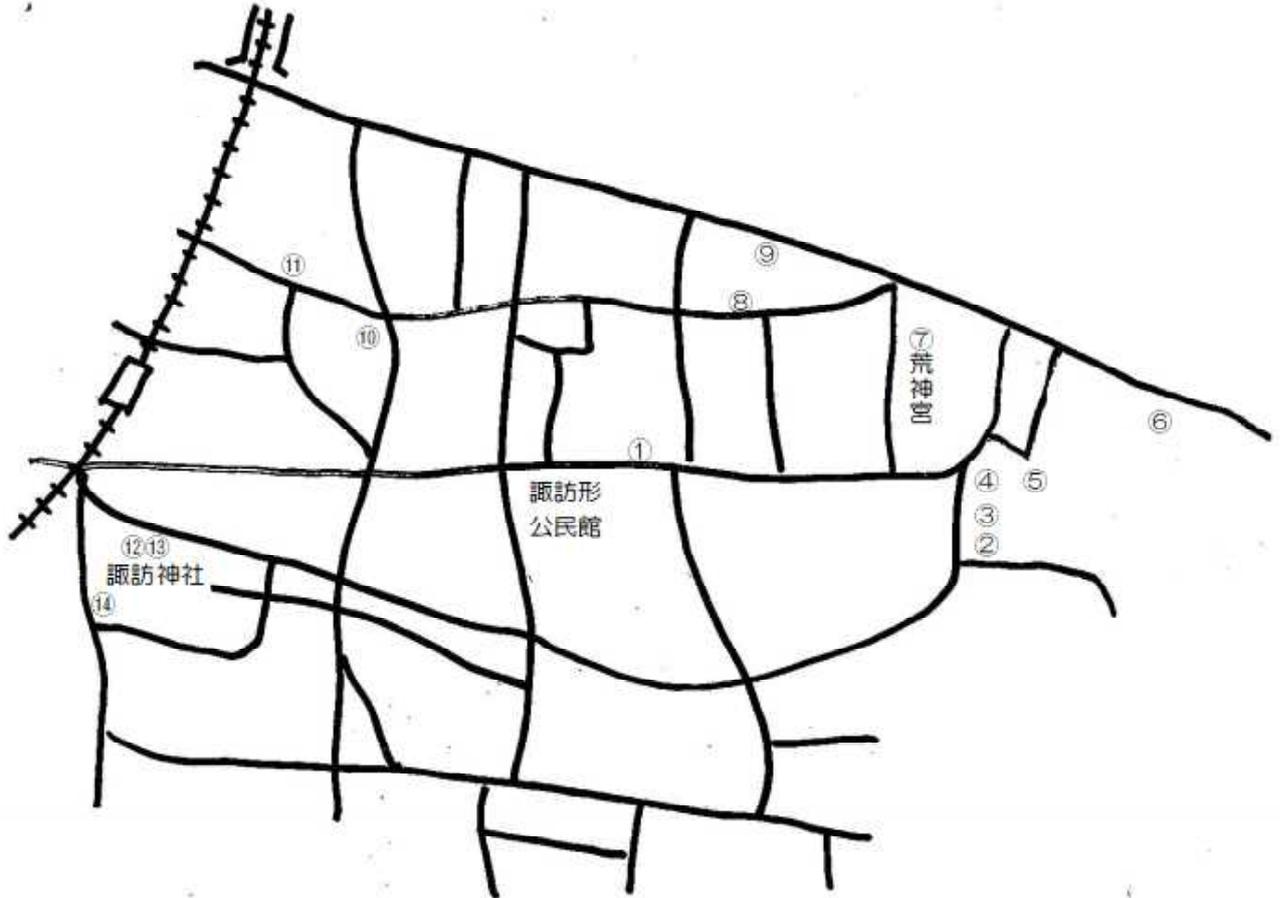
期 日：2025年 9月 20日 (土)

内 容：講演「諏訪形の石像遺物」 講師：北沢伴康諏訪形誌活用委員会顧問
ウォーキングと石像遺物見学

※雨天の場合は、講演のみとさせていただきます。

日 程：9：00～ 9：30 講演会（会場は諏訪形公民館）
9：40～11：00 地域内の石像遺物見学（ウォーキング）

諏訪形には次のような場所に石造遺跡・遺物があることが確認されています。



- | | |
|-----------------------|--------------------|
| ① 堂村道祖神（今回は前を通るだけ） | ② 通称「カンカン石」 |
| ③ 高町の道祖神と古い道祖神 | ④ 庚申塔 |
| ⑤ 併冢の碑 | ⑥ 水天宮 |
| ⑦ 荒神宮 | ⑧ 東浦の道祖神（今回は行きません） |
| ⑨ 馬頭観音 | ⑩ 田中の道祖神（今回は行きません） |
| ⑪ 宮下惇徳翁頌徳碑（今回は行きません） | ⑫ 招魂碑 |
| ⑬ 忠死碑 | ⑭ 諏訪神社の石祠群 |
| ○ 小菅訓導遭難記念碑（今回は行きません） | |

なお、やや離れているために今回は行きませんが、これらの他にも以下のような石造遺跡・遺物が確認されています。

- | | | | |
|--------|----------|------------|------------------|
| ・上の山の神 | ・下の山の神 | ・玉窓妙金法尼の石祠 | ・大山祇神社の石祠(石尊山山頂) |
| ・飯綱社 | ・道近田の道祖神 | ・廻し場の石 | ・旧蚕影神社 |

今回は諏訪形地区内にある、いろいろな石造遺物を訪ねます。「石造文化財」と呼べるものから、何だかよくわからないものまでいろいろですが、なかなか変化に富んだウォーキングイベントになりそうです。

①堂村道祖神（今回は前を通るだけ）

道祖神は、当イベントでも何回も触れているとおり「猿田彦大神」をはじめとする道案内の神とされ「塞の神」とも呼ばれています。また、村落への邪霊の侵入を防ぎ、旅人の安全を守る神として、古来から庶民の信仰の対象となっていました。江戸時代以後は、その形状から良縁、安産、夫婦円満、子どもを守る神として、多岐にわたって信仰されてきています。またその多くは、祀られている場所が村境となっています。諏訪形では、概ね村の東西南北にあたる地籍に立てられています。諏訪形にある道祖神はいずれも、建立年は不明です。

②徳本上人名号碑（カンカン石）

徳本上人名号碑、通称「カンカン石」については、以下『諏訪形誌』282ページから引用します。また、上田市内の徳本上人名号碑については『諏訪形誌Web版』もご参照ください。

文化14年（1817）の銘のある独特の字体で彫られた「南無阿弥陀仏」の石碑が法泉海道と道又木地籍の境に建てられています。

この石碑は徳本上人（1785～1816）という浄土宗の僧侶が、文化3年（1806）の春から秋にかけて信濃国へ教えを説いて歩いた際、諏訪形の地に立ち寄って説法をしたことの証として建てられたものです。



石碑の裏面には「願主 西心」「世話人 柳澤松達・荒井政吉 村中」などと彫られています。僧籍のある西心という人の呼びかけに応じて世話人の二人が中心となって浄財を集め、碑を建立したものとされます。

石材は自然石で、高さ1.5m、幅1.6m、やや菱形で厚さも薄く、叩けばカンカンと音がするので、いつしか「カンカン石」と呼ばれるようになって親しまれてきました。

平成29年（2017）5月、カンカン石周辺の道路拡幅工事にあわせて名号碑建立200年の記念祭が行われました。

なお、『諏訪形誌』の「文化3（1806）年の春から秋にかけて信濃国へ教えを説いて歩いた」という記載は「文化13（1816）年」の誤りと思われる。

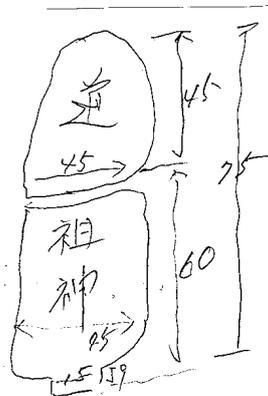
③高町の道祖神

高町の道祖神は諏訪形に昔からある4基の道祖神（現在は5基）のひとつで、旧諏訪形村の東はずれ、旧別所街道沿いで「カンカン石」のすぐ隣に位置します。もともとは現在の場所よりも少し南寄りにありましたが、徳本上人名号碑（カンカン石）の移転に伴って現在の位置に移りました。



○古い道祖神

徳本上人名号碑の移転時、現在の道祖神のすぐ脇に埋められていたのが見つかったものです。この道祖神の背面には「文政十丁亥（注：1827年）二月八日高町」と線刻されていました。「カンカン石」建立の10年後です。



何か凶事でもあったのでしょうか、この道祖神は半分に切られた状態でこの場所に埋められていましたが、それについての経緯などについては記録も残っておらず、不明です。現在はカンカン石と高町の道祖神の間に埋め戻されています。

また、この近くからは五輪塔の火輪と見られる残闕も見つかっています。これは、「カンカン石の近くに庵があった」という説を証明するものなのか、それとも、後述する荒神宮の失われた五輪塔の一部なのかは不明です。



（掘り出されて当時の道祖神と北沢伴康さんの野帳）

④庚申塔

旧諏訪形村の中には3基の庚申塔があります。そのうち、現在の諏訪形にあるものは1基のみです（須川に1基、中村に1基）。諏訪形の庚申塔は、「カンカン石」の北隣、細川家墓所の西隣にあります。この場所は旧別所街道の路傍に当たる場所と考えられているあたりです。

この庚申塔は高さ110cmで、刻印には「元禄6（1693）年癸酉（みずのと・とり）11月20有日建立」とあります。一般的に庚申塔は60年に一度巡ってくる庚申（かのえ・さる）の年に建てられるものです。癸酉は庚申の10年後です。この庚申塔がなぜこの年に建てられたのかは不明です。



この塔に刻まれている青面金剛は左手に宝輪、右手には鎌剣を持っています。また、足下には鶏、右下には蛇、縄などが刻まれており、台座には「敬白」「施主」の文字も見られますが、施主の名前は確認できていません。



⑤不明の石碑（併冢？）

細川家墓所の東隅に何なのかわからない石碑（？）があります。傷みが激しく刻まれている文字が読み取れないこともあって、何の碑なのかはきりはわかりませんが、どうやら「併冢」と刻まれているようです。北沢さんのお話では、共同墓地などで、夫婦いっしょの墓碑に「同會」と刻まれることがあり、それと同様の意味ではないか、とのこと。そうだとすると、この場所は共同墓地であった可能性があることとなります。

⑥水天宮

荒神宮の北側と千曲川の対岸との間に渡し船があったことが知られています。『諏訪形誌』274ページには以下のように説明されています

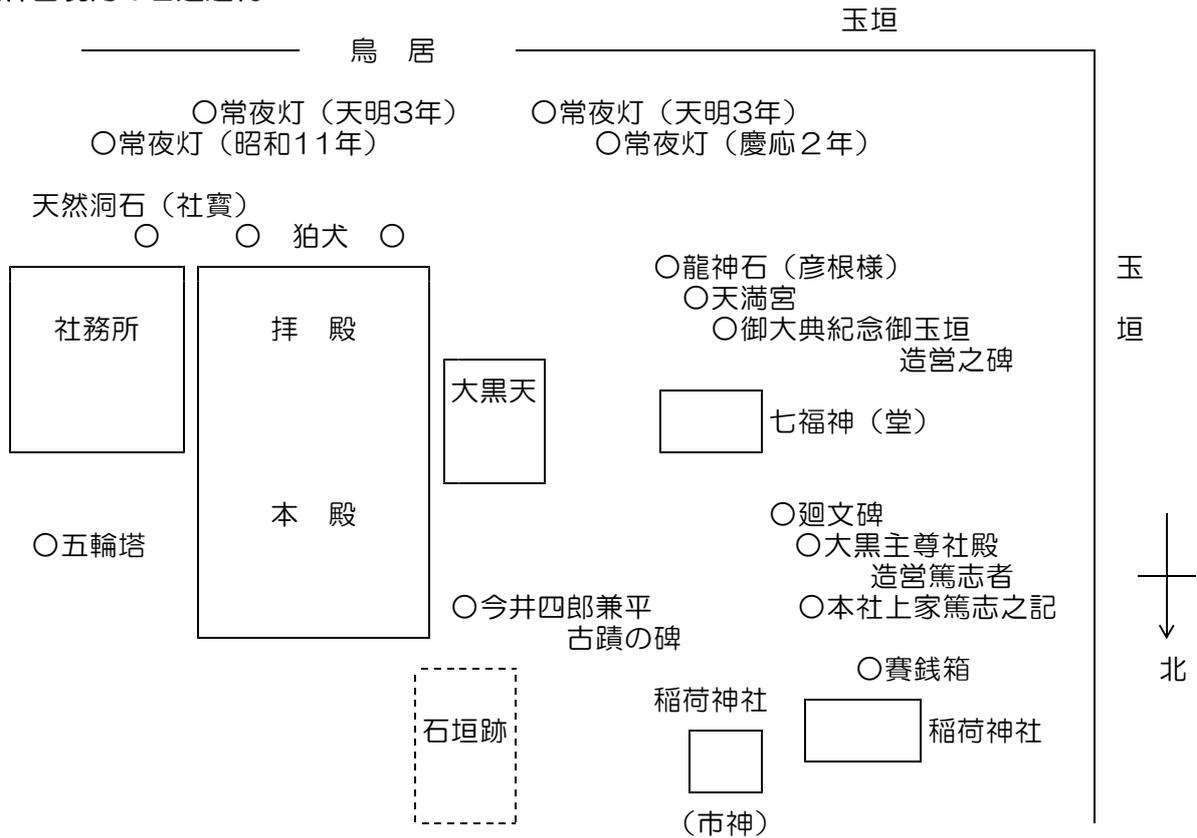
千曲川堤防道路を小牧方面へ向かう途中、諏訪形の集落が途切れる手前の右側に高さ約60センチメートルの石積みの壇上に水難防止を司る神が小さな石祠に祀られています。「水天宮」は、灌漑用水や堰、河川、溜池などの守護神であり、水田稲作にも深く関わっている神様で、御所赤岩地籍の千曲川沿いの道路、上田橋北詰付近、水産試験場東側などあちこちに祀られています。

諏訪形にある「水天宮」の石祠は、昭和14（1939）年ころ諏訪形区や漁業関係者らが建立したものだそうです。毎年6月、鮎あゆ漁が解禁になる前には、諏訪形在住で千曲川の漁業権の株を所有している関係者30人ほどが集まって、河川清掃と荒神宮神主による事故防止の祈願神事を行います。その後、公民館などに移動して直会に移り、親睦を深めています。

水天宮のある場所は、昔、船着き場があった場所のすぐ近くです。水神宮は水上交通の守り神ですから、この場所にあることはうなずけます。なお、2024年に鳥居の額を新しくしました。揮毫は両角閑堂先生です。



⑦荒神宮境内の石造遺物



玉垣

玉垣とも呼ばれ、神域と世俗とを分ける境界のことです。古くは植物で作られた「柴垣」が用いられていたようですが、神籬と磐座・磐境が結びついて石造の垣根などに代わり、現在の神社にみられる玉垣に変わっていったと考えられています。



荒神宮の玉垣は、神社の西側と南側にあり、大正15（1926）年4月に作られた、と刻まれています。玉垣造営を祈念して建てられた「御大典記念御玉垣造営之碑」には奉納者約290人の名前が残っています。それによると、地元の人たち24人のほか、長野県内（長野市・小諸町・その他近隣の町村）や県外（広島市・栃木県・奈良県（3名）・兵庫県・小樽市・横浜市・三重県・愛知県・東京市（2名）・南満州遼陽市・新潟県・和歌山県・神戸市）など、奉納者は日本全国に広がっています。当時の荒神宮が広く信仰を集めていた証になるものと思われます。なお、この玉垣には「参上神社」と刻まれた石も見られます。

常夜灯

鳥居をくぐると、その両側に4基（2対）の常夜灯があります。このうち、「慶応2年（1866）2月」と刻まれているものについて、今井武雄さんの「老生の妄言思い出の片々」の中に以下のような記述が見られます。

当宮境内の西隅に高さ二十尺の石灯籠がある。奉納者は上野国多胡郡甘楽郡講中慶應二丙寅二歳二月と刻んである。
 多胡郡は現在の群馬県吉井町、甘楽郡は甘楽町と富岡市附近で、此の地方は上信電鉄の沿線、下仁田町から本県の内山峠、佐久市への大昔からの交通の要路即ち上州、信州、関東、近畿地方への道で、殊に両県の物資その他の交流関係多く、県内地名の木曾福島など吉井町甘楽町附近に同じ地名があるのは治承の昔、木曾一族や関係の武者たちが居住したという事に依ると思われる。
 また、信州上田荒神宮夜燈の奉納は此の宮が木曾一族中原家今井別当の奉紀の宮であるこの縁故で、木曾一族退散から約六百年余の慶應二年、往時を偲い縁りの人々が有志奉納をしたと思われるが、荒神宮にも、吉井町多胡村地方にも何等記録なく、夜燈の話もなく只大昔、木曾一族が住んだという昔話は今に残っている。

この「慶応2年の常夜灯」はたいへん立派な造りで、高名な高遠の石工の手によるものかもしれません。小牧の四箇牧神社にも高遠の石工の名前が刻まれた常夜灯が残っていることから、可能性はあると思われます。

もう1基の常夜灯は天明3（1783）年に上州の人たちから寄進されたものです。天明3年というと、旧暦の7月（現在の暦だと8月）に浅間山が大噴火を起こした年です。上州の人たちが浅間山の噴火が納まることを願って寄進したものかもしれません。

右図の左上（奥）が慶応2年の常夜灯、手前が天明3年の常夜灯です。



神籠石（彦根様）



鳥居をくぐってすぐ、本殿に向かって左側（境内南西の隅に近い場所）には「神籠石（彦根様）」と記された石があります。「彦根様」は「子授けの神」ではないか、とも考えられるようですが、実は何なのかよくわかりません。有賀酉夫さんは、「先代の別当（今井正昭さん）のころ、珍しい石が出たという話を聞いた。雨ざらしだったので、小屋で覆った」と話してくださいました。

不明の祠（天満宮？）

神籠石（彦根様）の北隣にも石祠がありますが、これが何なのかははっきりしません。諏訪形誌活用員会顧問の北沢伴康さんによると「屋蓋部の両側面に梅鉢の紋章が見られるので、天満宮ではないか」とのことです。



御大典記念御玉垣造営之碑

「玉垣」の項で触れたとおり、1926（大正15）年に玉垣が建立されたときに寄進をした人の名前が刻まれています。県内外から約290名もの人たちが寄進があったことがわかり、当時の荒神宮信仰の広がりを示すものと言えます。

廻文碑

荒神宮境内、鳥居をくぐって左手の西側の一角に、高さ1.7m、幅1.1mの「廻文碑」が建てられています。「回文」または「廻文」は「しんぶんし」「たけやぶやけた」などのような、上から読んでも下から読んでも同じ音になる文で、古くは平安時代の作品も記録に残っている、古くからの言葉遊びです（「山本山」はちがいます（笑））。

この石碑は、文久3年（1863）春に、地元諏訪形の荒井助次郎、宮下理兵衛、宮下勝右衛門や、小牧、中之条の人たちによって建てられたもので、力強い草書の文体で彫られています。また、廻文碑は数が少なく、たいへん珍しいものとなっています。

なお、以下の碑文口語訳は『諏訪形誌』編纂当時の城下小学校長塚田量さんによります。



正面

すわかたに神の御代にかすさのをのさすかに夜見のみかにたかわす
天廻舎回翁

【口語訳】

この諏訪形の地は神の御代からであろうか、すさのをの尊が、やはり（黄泉の国を支配したすさのをらしく）夜もよく見えてくる美しい泉下に違いない所であろう

側面

流れ見す閑かきかとの すみれかな

【口語訳】

川の流れが見える長閑な雰囲気醸し出している村（社）の角に
ひっそり咲いているすみれだなあ

大黒主尊社殿造営篤志者



その名のとおり、拝殿の西隣にある大黒主尊社殿の造営を記念したものです。「大正三年八月」「第二九代今井正美」とあり、寄付者の名前が刻まれています。なぜか一時期、この石碑の拓本をとる人が多く、墨を塗ったままになるなどの問題があった人気の（？）石碑、とのことでした。



「大国主大神」と、七福神のひとり「大黒天」とのあいだはけっこう混乱があるようです。「大国主大神」と「大黒天」について、出雲大社では次のように説明しています。

「大国主大神」には、他にも「大己貴神（おおなむちのかみ）」、「大物主神（おおものぬしのかみ）」、「八千矛神（やちほこのかみ）」、「大国魂神（おおくにたまのかみ）」、「顕国魂神（うつしくにたまのかみ）」など多くの御神名があります。ただし、いわゆる「七福神」の中の「大黒天」とは、正確には別の神様です」とのことです。

なお荒神宮では、「大国主大神」と「大黒天」とは同じものであると見なしている、のことです。また、荒神宮では1984年の甲子の年に盛大な祭典が行われたようで、左図のようなパンフレットが残されています。



本社上家篤志之記

1895（明治28）年起工、翌年4月に竣工した荒神宮改築時の記念碑です。碑は、発願者今井石太郎、発起者細川吉次郎ほか8名と寄附をした人たちの名前が刻まれています。

不明の石祠8基

「本社上家篤志之記」の碑の北側には8基の石祠が並んでいますが、どのようないわれのものなのかはよくわかりません。当代別当の今井貴美さんのお話だと、各町内会などいろいろなところで管理しきれなくなった祠を預かっているものだろう、とのこと。以前は祝祭日に祠を預けた町内会などが祝祭を開催することもあった、とのこと。

北沢伴康さん（諏訪形誌編集委員長・諏訪形誌活用委員会顧問）は、この8基の中のどれかが「ミシャグジ（御左口神、御社宮司、御射宮司、御社宮神 など）」ではないかと考えておられるようです。「ミシャグジ」とは、主に諏訪地域とその周辺に祀られる神霊・精霊の総称であるとされますが、様々な説もあって、何物なのかは特定されたいようです。「ミシャグジ」の祠などは北関東から京都、奈良、和歌山あたりまでに広く分布しており、上田・小県地域にも104社確認できる、とのこと（今井野菊さんの研究に基づく）。なお、北沢伴康さんは、上田民俗研究会機関誌『上田盆地No. 24（1986年刊）』に上田小県地域を中心とした「シャグジ」の建立場所についての調査研究を発表されています。



また、一番北側の祠には上右写真のような刻印が見られることから、稲荷社であることがわかります。

稲荷社の賽銭箱

稲荷神社の狐像の間、正面にある石は賽銭箱は「がまぐち」のような形をした、ちょっと珍しいものです。これも「石造遺物」かな？



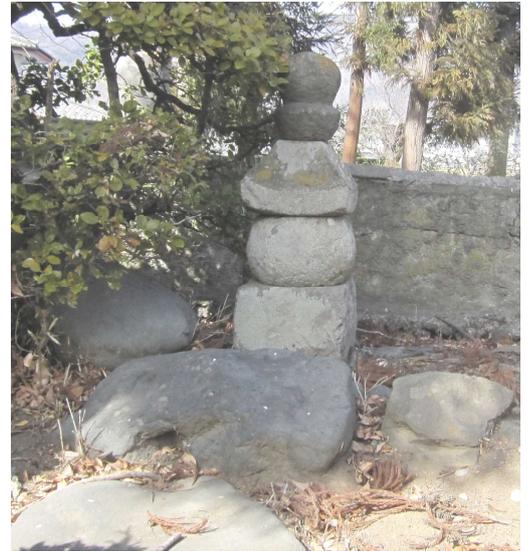
五輪塔（上田市指定文化財）

荒神宮石造五輪塔は神社本殿の右後方（本殿裏手の北東側）、植え込みの高台に安置されています。総高112cm。上田地方としては中程度の大きさを、鎌倉時代の作と思われます。

一番下の地輪は、次の水輪を安定させるために、上面を皿状にへこませてあります。水輪はやや押しつぶされた形状を呈しており、屋根にあたる火輪の軒口はゆるやかな反りがあり、力強く厚手に造られています。火輪の上に載る空輪と風輪は一石でどっしりと造られています。

荒神宮石造五輪塔についての故事来歴等については記録がないのでわかりませんが、木曾義仲の四天王のひとりであった今井二郎兼平に関係のある人の供養塔ではないか、とも言われています。

この五輪塔は昭和59（1984）年に、上田市の文化財に指定されています。



天然洞石（社寶）

ちょっと目立たない場所ですが、拝殿の右（東）側に「天然洞石」が置かれています。「天然洞石」と彫られた石の上に載っている天然石には、貫通した穴があります。参拝者の馬をつないでおいたものでしょうか？



狛犬

拝殿前には一対の狛犬があります。刻印によると、1935（昭和10）年に上田市常入町の関熊吉（「きち」の文字土冠に口）という人が奉納したものです。



手水石（嗽）

鳥居の外、東寄りに置かれた手水石の側面には何か線刻が見られます。



荒神宮本殿東側には石積み跡と大木を切り倒した跡が見られます。今井宮司さんのお話によると以前この石積みの上には、何基かの（数は不明）五輪塔が建っていたとのこと。ただ一時期盗難が多く、五輪塔そのものを倒しておくうちに、残念ながら散逸してしまったようです。

この石積み跡に上がるのは危険なのでやめたほうが良いと思いますが、石積み周囲には明らかに人の手が加わったものと見られる石（「残闕」と呼んで良いでしょうか？）が見られます。これらが、五輪塔があったことを示しているものと思われます。



⑧東浦の道祖神（今回は行かない予定です）

中村さん宅前の路傍にある、旧諏訪形村の北端に位置する道祖神です。



◎馬頭観音

目立たない場所ですが、堤防道路の南側に小さな馬頭観音があります。馬頭観音は馬の守り神、馬の供養と結びつくことが多いと考えられていますが、この場所は街道筋ではなく、なぜこの場所にあるのかはわかりませんでした。また、施主の名前と思われる「卯女」と刻まれています、どのような人なのかもわかりませんでした。

その後、この馬頭観音について、中村恵一さんにこの土地についてよく知っておられる方に問い合わせさせていただいたところ、次のようなことがわかりました。

この場所で、馬が死んでいたことがあった（年代は不明）。当時、この土地の持ち主だった卯女（うめ 名字は不詳）という女性がとても信心深い方で、馬の死を悼み、この場所に馬頭観音を建立した。なお、この土地はその後、昭和20年代の農地解放を受けて持ち主が転々とし、現在は諏訪形に住む別の方の持ち物となっている。



⑩宮下惇信翁頌徳碑（今回は行かない予定です）

宮下惇信翁（宮下理兵衛）は諏訪形地域のみならず、広く上田地域の行政や産業の発展に尽くした人で、現在、惇信翁の子孫にあたる宮下健さん宅の庭に頌徳碑が建てられています。

宮下惇信翁とその頌徳碑については『諏訪形誌』282ページや『諏訪形誌Web版』などで紹介させていただいているとおりです。そちらをご参照ください。

なお、『諏訪形誌』282ページでは「宮下惇徳」の名前で紹介されていますが、これは誤りと思われるます。



⑪田中の道祖神

旧諏訪形村の西のはずれだったあたりに2基の道祖神が建っています。地域の方が子授けを祈って奉納したもの、とのこと。今回は、この道祖神の前を通ります。



○小菅訓導遭難記念碑

今回は行きませんが、小菅訓導遭難記念碑も「石造遺物（文化財）」と呼べるものかもしれません。詳しくは『諏訪形誌』『諏訪形誌web版』をご参照ください。



⑫招魂碑

諏訪神社境内の北隅に「招魂碑」と「忠死碑」が建っています。「招魂碑」は日露戦争から第2次世界大戦までの戦争で亡くなった、この地域出身の方々を悼む石碑です。諏訪形地区のみならず、中之条や御所、三好町の人々も含め、多くの方々の名前が刻まれています。

なお、終戦直後は「この碑は（アメリカ軍との関係で）まずいかもしれない」として地面に埋められ、その後掘り出されて現在のかたちになっている、と古老が話してくれました。

⑬忠死碑

忠死碑は、諏訪形、御所出身で、日清戦争で亡くなったお二人を祀ったものです（縦書きで彫られています）。

表	忠死	陸軍憲兵一等軍曹 近衛輜重輸卒	柳澤 円吉 君 横関嘉三郎 君	碑
裏	明治二十七八年戦役失(?)亡者 明治二十九年四月 城下村有志者建之			



旧日本軍では、戦闘正面ばかりが重視され、「輜重輸卒が兵隊ならば、ちょうちょ、とんぼも鳥のうち」というざれ歌さえあるように、兵站が軽視される傾向がありました。兵站を支える輜重輸卒（輸送兵卒）は、蔑視の対象だったようです。諏訪神社の忠死碑では、輜重輸卒と一等軍曹とが差がなく扱われており、少しホッとするものがありました（窪田善雄さんの資料による）。

⑭不明の石祠群（14基）

諏訪神社の南西側、駐車場の西隅に14基の石祠が並べられています。これらが何なのかについては、残念ながらわからなくなってしまっています。すでに亡くなってしまった窪田為男さんの話では「この中に巖島神社がある」とのことですが、今となってはどれがそうなのかわかりません。

また、これらの祠のどれか（これについてもどれなのかはまったく不明ですが）は「ミシャグジ（御左口神、御社宮司、御射宮司、御社宮神）」であるという伝えもあるようです。「ミシャグジ」とは、諏訪大社上社の神事に登場する、諏訪地域とその周辺に祀られる神霊、精霊の総称ですが、実態はよくわかりません。また近年は、諏訪の「ミシャグジ」と他所の石神や「ミシャグジ的なもの」は切り分けて考えるべきであるという意見も出てきています。



なお、諏訪神社境内南端に2基の石祠があります。そのうち、向かって右側の祠は、中村から遷された「秋葉神社」とのことです。